



関西学院同窓会 大阪支部

INTERVIEW

<http://www.kwangaku-osaka.org>

2016.09

編集室長対談

FILE

No.03

タイ王国大阪総領事館 総領事 ドウシット・メーナパン氏

タイ人の憧れ——「日本」

小島 保 編集室長 (以下小島) 日本にはどんなイメージをもっておられるのでしょうか？

ドウシット・メーナパン (以下メーナパン) タイ人にとって日本および日本人に対するイメージは非常に良いもので、特に規律正しさはもともと尊敬に値する美点だと感じています。「タイ人

も見習わなければ」…そんなことを言い合う場面も少なくありませんね。

個人としては…まあ、出会う人やシチュエーションも異なるので、これは本当にごく個人的な感想ではありますが、タイ人一般の持つイメージを裏切らないものだと考えますね。

一方で日本人とタイ人が大変似ているところもあるように思います。それは家族愛の深さでもいえるのでしょうか、実際には家族だけではなく、広く「仲間」を大切にするという点ですね。こういったところは考へ方のよく似た民族同士なのかもしれません。

タイ人が日本人に見習うべきところは真面目さと周囲への気配りだと思います。タイ人にはあまりないところではないかな (笑)。

小島 では大阪に対してはどうでしょうか？イメージは「日本」とは異なるのでしょうか？

メーナパン 着任前に、プライベートで大阪には何度か来たことがありますが、その時には感じるものが出来なかったことが、今回の赴任で見えてきたように思います。一般の「日本人」と「大阪人」は同じではないように思います。何と云って

もビジネスの街なので、生活のリズムというのが…全体的にスピードが速い。

また住みやすい街であるとも言えますね。食べ物もおいしいですし、タイ人に人気のある観光スポットもありますしね。

小島 人気のスポットとはどこでしょうか？

メーナパン もちろん大阪城、そしてUSJ、海遊館、そしてショッピングです。最近大変人気が高いのはグリコの看板のある道頓堀ですね。そこで写真を撮ることが流行っているようです。

小島 タイの人にとって、日本の中で一番人気に高い観光地はどこなのでしょう？

メーナパン 一番は東京です。関西は一番目のエリアです。その中でも人気があるのは京都と奈良、お寺を見に行く人が多いので。

最近人気が高いのは福岡です。福岡空港への直行便が飛んでいるということもあって、また北海道も最近の「ヒット」です。札幌にも直行便が飛んでいる…直行便が飛んでいるのは札幌、福岡、大阪、名古屋、東京、この5つの都市とそのエリアがタイ人には人気の観光地となっていますね。

中野順哉 編集員 (以後中野) 以前映画で紹介された場所が、タイ人の間ではとても人気のスポットになっているという話を聞いたことがあるのですが…

メーナパン 私も幼いころから日本を舞台にしている映画を何本も見ましたよ。100本以上はあるんじゃないかな。それほどタイ人は日本が大好きなんですよ。

タイのある有名な小説家が日本のことをテーマに書いたことがあります。内容は第2次世界大戦。日本軍はミャンマーに行くためにタイを通過

してゆく…主人公はそのなかの日本人です。大半のアジアの国々がこういったテーマで小説を書くとなると、攻撃・侵略をした日本ということになるのですが、この作品はそういったものではありません。もっとナイーブな恋愛もので、その後も何度も何度もテレビドラマ化や映画化されています。タイ人は日本をポジティブに受け入れている例だと言えるのではないのでしょうか。



小島 そういう小説に親しむ世代と、若い世代では日本に対する印象は違うのではないですか？

メーナパン 日本に対するイメージにジェネレーションギャップはないと思います。ただ、最近では選択肢が増えていることは事実ですね。私たちが若い頃は欧米や日本しか念頭になかったのですが、映画もアニメもアメリカ・日本を中心に選択するわけですが、最近では韓国やインドの映画などを楽しむ人は多いので、若者の選択肢が増えている…車も私たちの若い頃は断然「日本製」でしたが、今はインドや中国を選ぶ人もいますし…でも日本の人気ほどの年齢層でも共有していますね。

中野 逆に日本人の持っているタイのイメージというのは、正に公認領事のおっしゃられた選択肢が増えるという中で芽生えてきたものなのかもしれません。というのも、残念ながら我らより前の世代の日本人が、タイに特別なイメージを持っていたという気がしないからです。

ただ近年アジアの国々との関係が深くなることで、東南アジアの国々の個々の違いというのがよくよく一般人の間でも意識されて来た、そんなふうに思います。

国王は国民にとっても一人の「父」

中野 そんな中でも二点ほど、「以前の日本人」から受け継がれてきているタイのイメージあります。一つは日本と同様に王室を持っていること。もう一つは独立を保った国であること。そこで私からの質問は、現国王ラーマ9世とタイの国民との関係がどういった状況にあるのか…それについて教えていただきたいのですが。

メーナパン この部屋にも飾られていますが、国王の写真を飾る…ということは、何も強制されていることではありません。にもかかわらずほとんど全てのタイ人の家には写真が飾られています。これは国民皆が国王を心から尊敬し愛しているという証でしょう。国王は国民にとっても一人の「父」なんです。

また国王は国民に喜びを与えることを常に考えておられます。長年続けてこられた事業は、どれもそういった思いやりに満ちています。その結果、タイを他の周辺国と比べても政治的、経済的、文化的、精神的に落ち着いた「良い状態」に導いていると言えるでしょう。

1992年の政治的危機においても法律上

は政治的な権限があったわけではないのですが、国王が英断的な意思表示をすることで、首都が無開城するということがありました。これは国王の偉大さを物語る事例であると思います。

中野 王室への敬意というのは、現国王が即位されてからのことなのでしょうか。それとも伝統的に現王室に対して国民は敬意を払っているのでしょうか。

メーナパン 伝統的に王室を国民は敬つてきています。現国王ラーマ9世のほかに、ラーマ5世の治政も偉大でありました。ラーマ5世は現国王の祖父ですので、日本の明治時代にあたるのではないのでしょうか。ラーマ5世のなされた最も偉大な改革の一つは、貴族・高官が召使を私物化することを禁止し、人権を尊重したという点です。また電話を導入するなど、産業においても大きな改革を成し遂げられました。

更には教育ですね。まずは沢山の御子さん全てをヨーロッパに留学させ、広い視野やものの考え方を国にもたらそうとなされました。名古屋にラーマ5世の銅像もあります。日本でも有名な国王なのではないのでしょうか。

タイと日本の正式な外交関係もラーマ5世の時代にはじまりました。ほぼ130年前のことですね。

中野 個人的な意見ですが、私は日本の現代の民主主義は、行きすぎているのではないかと、いう疑問を持っています。そういった意味ではタイの国王と国民の在り方というのは、とても興味深い事例であるような気がします。国民にとっても精神的な支えにもなっている…という点が特に。政治の実際は国



民の、それこそ民主主義によっておこなわれつつも、精神的には国王がそれを支えている。絶妙なバランスを感じるのですが。

メーナパン 民主主義は自分の考えを自由に発言する上では、とても大切な考え方だと思いますし、タイ人は特に「階級的な庄力」というものを嫌います。

国王との関係については、もっとフラグマティックなものだともいえるかもしれませんが。法律上では国王に政治的な権限は与えられていません。ただ国民が答えるに行き詰った時、国王より「意見をいただくことで多くの困難を乗り越えてきた…だから、国王を皆頼りにしている」というのがタイの現状です。

日本の民主主義について、私は「行きすぎている」とは感じていません。むしろ欧米にこそ、そういった危惧を感じる人が多いですね。

留学をしたい国第1位

小島 日本での赴任は大阪以外にどちらか？

メーナパン 日本への赴任は今回が初めてです。

小島 先ほど、国王様がお子様を全て留学させたというお話がありました。現在一般のタイの学生にとって留学はポピュラーな選択肢なのでしょうか。

メーパン 近年留学する学生は多い。国から奨学金を受ける人と、自費で行く人がいますが、奨学金に関してはもう100年くらいの伝統がありますよ。留学先となる国は、教育のレベルが高い国、あるいは技術力の高い国です。ヨーロッパ、アメリカ、日本、オーストラリアなどを目指す場合が多いですね。そして留学してきた学生は帰国後国の発展に寄与すべく積極的に貢献してくれるので、留学は国としても、とても大事なことであると考えています。

この総領事館のスタッフもほぼ全員が留学経験者です。

小島 我々の母校である関西学院大学は、海外への送り出しも、海外からの受け入れも、ともにその数を増やしていきたいと考えています。ただ、海外から来られる留學生の最近の状況を聞きますと、留學生の選択肢の中で、日本を選んだ留學生の数が随分少なくなってきたというふうなんです。

タイではそのあたり、アジアの留學生としての日本の地位というものは、どういった状況にあるのでしょうか。

メーパン アジアでいうと、日本はまだ一番だと思えます。最近では中国に行く人も増えていますが、将来的なタイと中国の関係を視野に入れて…という動機ですね。韓国は大変少ないです。インドも多くないですね。インドに行く人はほとんど英語が通用することが理由です。やっぱり一番は日本だと思います。

大阪をいかにタイ人にPRするべきか

小島 タイのみなさんが持つておられる日本のイメージを、我々ももっと良いものに磨いていかなければいけないと思うのですが、総領事もタイの文化を日本に紹介する機会が沢山あると思います。その視点から、日本はきちんと自国の文化をタイにアピール出来ていると思われませんか。

メーパン 日本はもう何もなくていいのではないのでしょうか。(笑)。タイ人は本当に日本のことを良く知っていますし、日常生活においても「日本と接する場面は少なくありません。朝起きて出勤には日本の車、バスも日本製、日本の料理もタイでは大変な人気です。生活の一部といえるでしょう。

技術力、教育など、日本を目指したい点が沢山ありますし、3年前にタイ人に対してビザの免除措置がとられていることもあって、この数年で日本に足を踏み入れたタイ人の数は3倍に膨れ上がっています。ですので、もう十分(笑)。

小島 さきほどグリコの看板、USJ、大阪城といったスポットの名が出てきましたが、それ以外に、今、総領事が旅行社に「大阪のここがいいよ」とあるいは「これを食べるべき」と推薦したい場所・モノというのはありますか。

メーパン まだそこまでは…(笑)。料理に関しては、特に大阪という訳ではないのですが、鉄板焼きやお寿司はさすがに美味しいですね。ただ、タイ人一般の方もっと日本のことを知っているかもしれないので、「ここ」「これ!」と改めて伝えることはまだ出来るほどの知識をもっていません。

小島 日本では関東、関西、九州…と地域によつ



て味が違うので、是非総領事には大阪の味をたっぷり味わっていただければと思います。

メーパン 色々試したんです。ただ、結局は自分の好みにもどってしまっんです。タイの料理は味が濃い。だから日本の料理を食べる時も、味の濃いものを好んで食べてしまいます。ソースや醬油をかけて…。

中野 タイフエスティバルなどを見せていただくことで、「あめすいいなー」という感銘をうけるとともに、うまくPRなされているな…という感想を持つのですが、総領事、「自身はどいつた点に留意して自国のPRを考えておられるのでしょうか。」

メーパン 相手にどのように理解してほしいのか、どのようなイメージを持つてもらいたいのか…これを明確に考えるということが一番大事だと思います。例えばタイの場合、文化が特徴的なので、ここが力強いPRポイントになります。日本人もまた、そういった文化を知ることに興味を持っているので、日本でのPRはここに力を入れます。まずタイ人の日常生活を知ってほしいので、料理ですね。料理も立派な文化ですから。その他「これを見せたい」「理解してほしい」という様々なモノに対しても、必ず文化という要素をそこに盛り込んでいくようにしています。

大阪もタイ人にこう理解してほしいというコンセプトがあれば、それをテーマにしてPRするのが一番でしょう。また「誰に」という対象もはっきりした方が良いでしょう。

個人的な意見ではありますが、大阪の観光のPRをするのであれば、やはり料理が良いのでは。またタイ人が大阪に来たら何が出来るのか、これも具体性をもってPRするのがいいでしょう。

特にタイ人が観光で興味を持っているのは1に料理、2はショッピング、3はお寺です。「こ

のお寺に行けば、こんな願い事がかなった」といった噂を流すのも良いかもしれません(笑)。

京都・奈良はとても有名ですが、逆に大阪の寺が知られていない…という点を逆手にとってやるのもいいでしょう。例えば四天王寺の伝統とその背景にある物語性を伝えるとか。タイ人は沢山くると思いますよ。

※ 1957年に女流作家トシマ・ヤンディーが書いた「クークム」邦題「メナムの残照」。1970年に初めてドラマ化。1972年、1978年、1990年、2004年、2013年と6回にわたって放送される。1973年、1988年、1995年、2013年に映画化。

2015年10月6日

場所：タイ王国大阪総領事館にて収録

編集後記

「微笑みの国」と言われるタイ。そのイメージどおりの楽しい対談となりました。今回は日本との交流を中心としたお話となり、タイという国をPRをする上で、常に文化を意識しておられるとも伺いました。それを大阪や関西学院に置き換えて考えてみると、新しい発見がありました。ハード面を言い尽くしていても、ソフトの面をくくと掘り下げて考えてみればもつと材料がありそうですね。



小島 幸保

- 生年月日 1972年(昭和47年)7月7日
- 大阪女学院高校 1988.4-1991.3
- 関西学院大学法学部政治学科 1991.4-1995.3
- 最高裁判所司法研修所
司法修習生(第52期) 1998.4-2000.3
- 弁護士登録(大阪弁護士会) 2000.4
- 小島法律事務所開設 2006.4